
アンジェリーク | Marcel | 君がいるだけで.....

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンジェリーク—Marcel—君がいるだけで……

【Nコード】

N9595I

【作者名】

翠

【あらすじ】

【マルセル×リモージュ】女王試験が終了し、新女王にはアンジェリークが選ばれる。聖地での即位式は滞りなく行われ、お祝いの宴がひらかれていた。そんな中マルセルは複雑な気持ちを抱いていた。

マルセルの歌「Lily Sweet Lily」を聴いて書き上げました。（永遠のヴァカンス Vol.2 より）

（前書き）

KOEIから発売されているネオロマンスゲームシリーズ
「アンジェリーク」の二次創作です。

原作やキャラクターイメージを壊してしまうおそれがあります。
また、ネタバレも含まれますので、それらを十分ご理解の上、
ご覧いただけますと幸いです。

もうすぐ、僕の大好きなアンジェが女王になる——この僕の手で

さらさらとした絹糸のような金髪をなびかせ、明るいアメジスト色の瞳を、今は空と同じ闇色に染めて虚空を見つめていたマルセルは、その身が司る豊かな緑のサクリアをその白い手に集める。

「緑の『豊かさ』をエリューシオンへ！ エリューシオンの地が緑の『豊かさ』で潤いますように！」

瞳を閉じ、一瞬苦しそうに眉をひそめたが、意を決したように両腕をいっぱいに広げ、そのサクリアを金の髪の女王候補が「エリューシオン」と名づけた大陸へと注いだ。

緑のサクリアはゆっくりとエリューシオンを満たしていき、すでに建物でいっぱいだったその力はその島へと作用し、そこに新たな建物が建つ。すると同時に目が眩むような光の柱がたった。

それは、世界に新しい女王の誕生を告げ、そして……宇宙の大移動という、大きな、大きな出来事が皆を待っていたのである。

アンジェ、君が女王陛下だよ。……これで、よかったんだよ、ね？

不意に視界が揺れたかと思うと、暖かいものがぼたぼたと落ちてきてマルセルの手の甲を濡らした。

「あれ？ どうしてだろう？ 大好きなアンジェが女王様になつて、ずっと、ずっと僕らの側にいてくれることになったのに、どうして、涙が出るんだろう……」

瞳から零れ落ちる涙の意味もわからずに、幼い緑の守護聖は自分を抱きしめて座り込み、泣き続けることしか出来なかった。

アンジェ……会いたいよ……君に……！！

新女王の即位の式は滞りなく行われ、お祝いの宴が開かれていた。金の髪の新女王と青い髪の女王補佐官の周りには、守護聖たちが集まり和やかに時は過ぎていた。

「アンジェ、いや、もう陛下って呼ばなきゃいけないんだね。俺、一生懸命陛下のお役に立てるように頑張りますのでよろしくお願いします！」

風の守護聖ランディがさわやかにそう切り出すと、アンジェリークは澄んだエメラルド色の瞳を曇らせ淋しそうに微笑んだ。

「いやだ、ランディ様。今まで通りに『アンジェ』でいいです。いきなりそういう風に言われちゃうと……悲しくなっちゃいます」

「あつ、ご、ごめんよアンジェ。いや、でも……」

ランディがオロオロとマリンブルーの瞳に不安の色を浮べて、アンジェリークに言い募ろうとした時、凜とした声が響いた。

「陛下、立場というものをわきまえていただかないと困ります。もう貴方は女王候補などではなく、女王なのです。我々が貴方の事を『陛下』とお呼びし、陛下は我々の事を『様』などつけずに呼びずてにする。これは当たり前のことなのです。陛下を支え、お助けする為に我々守護聖があるのですから」

きっぱりとそう告げるのは、自信と威厳に満ちた守護聖の首座にある光の守護聖ジュリアスだった。

「でも、ジュリアス様……」

アンジェリークが悲しみでいっぱい視線をジュリアスに向けると、さすがのジュリアスも言葉に詰まった。

「あの、ジュリアス？ いえね、アンジェがこう言っているのですから、別にかまわないのではないでしょうかね？ 公式の行事などの時にはちゃんと『陛下』とお呼びして、それ以外の時にはアンジェの望むように今まで通りであれば問題はないと思うのですがね？」

そうフォローするのは、細い瞳をさらに細めて穏やかに微笑む地の守護聖ルヴァ。

「そうですよ！ 俺、その方がいいなあ」

「ええ！ 私も！」

ランディとアンジェリークが瞳を輝かせて賛成する。

「う、うむ。仕方あるまい。陛下のお望みとあらば……」

ジュリアスは不承不承納得したようだが、どこか嬉しそうに微笑んでいた。

「だよ。よかったな、お嬢ちゃん」

ジュリアスの許可が出たのをこれ幸いと、馴れ馴れしくアンジェリークの肩を抱き寄せる炎の守護聖オスカーがいた。

「ああっ！ オスカー様、ずっるいなあ」

「オスカー！　そこまで馴れ馴れしくてよいとは言っていないぞ」
そんな守護聖たちのやりとりを、マルセルは少し離れた所から見
ていた。

そして、その緑の守護聖を射るように見つめるルビーの瞳。

「ばあーか！！」

マルセルが驚いて振り向くと、どつかと椅子に座り込み、不機嫌
そうに足を揺すりながら、こちらに鋭い視線を投げかけている鋼の
守護聖ゼフェルがいた。

「何？　ゼフェル」

「別に。ただ、『バカ』がいるなと思って言っただけだよ」

ゼフェルはふいと目をそらし、テーブルに頬杖をついて、アンジ
エリークの周りで楽しそうにはしゃいでいる守護聖達に視線を移す。
含むものを感じたのか、マルセルは眉を寄せゼフェルに近寄り問
い返す。

「その『バカ』って、誰のこと？」

するとゼフェルはマルセルに向き直り、右の口角をゆがめて意地
悪そうな微笑みを浮べた。

「さあ、な」

そして、椅子の背に身体を預け直し、両腕で後頭部を支えながら
力いっぱい伸びをして言葉を続けた。

「……離したくないからって、自分だけのモノにならないからって、
必死こいて一番大切なものを、自分から手の届かない所に追いやっ
たバカがたくさんいるよなー。ま、オレからすりゃ、とどめさした
ヤツがいつちばんバカだと思っけどよー」

「……それって、僕のこと？」

含むものを感じて、マルセルの口調が自然と鋭くなる。

「おお、よくわかってんじゃない」

「僕、別にバカな事したって、思っけないもん」

マルセルの、自然と降ろされていた両の拳に力が入る。

「ほう、そうかよ？ 後悔でいっぱいって顔しておいてよー」

ゼフェルは面白そうに瞳を細めた。

「『後悔』って何？ 僕はアンジェに女王になって欲しかったんだ。その夢が叶ったんだ。後悔なんてしてる訳、ないじゃない」

唇をぎゅっと噛み、アメジストの瞳を遠くで楽しそうに歓談しているアンジェリークに向けた。

アンジェ……

「ハッ。ばつかみてー！ どうせ、『大好きなアンジェとずっと一緒にいたい。ずっと一緒にいる為にはアンジェが女王になればいい』なんて、単純に考えたんだろ？」

ゼフェルは大げさに肩をすくめてみせてマルセルを睨みつける。

「これだからお子様は！ おめーの本当の望みはそんなこっちゃねーくせに！」

真実を言い当てられ、マルセルの顔が朱に染まった。

「何だよ！？ 僕の本当の望みって！？ 僕はアンジェが聖地にいてくれれば、それだけでいいんだから！」

「キレイ事言っでんじゃねーよっ！ おめーはアンジェリークがおめーだけの側にいて欲しいんだ。おめーだけに微笑んで欲しいんだ。その頬に触れて、キスして、抱きしめて、全部お前だけのモノにしたいんだよっ！」

パンッ!!

乾いた音が響きわたり、穏やかな空気を一瞬にしてなぎ払った。

考えるより先に行動してしまったマルセルは、真っ赤になって鈍い痛みが走る自分の右の手のひらと、同じく赤くなったゼフェルの頬を呆然と見つめていた。そして、ギュッと右手を握り締め、瞳を閉じると苦しそうに言葉を紡いだ。

「そんな風に、言わないでよ……。アンジェリークは……僕にとつて……『天使』、なんだから……っ！ゼフェルの、ばかり!!」

きびすを返し、マルセルは森の中へ走り去って行った。

「……チツ。思いつきり殴りやがって……」

ゼフェルは血のにじんだ口の端を手の甲で拭いながら、傷ついたルビーの瞳をマルセルが走り去った方に向けていた。

「きゃー！大丈夫ですか!?ゼフェル様!」

騒ぎを聞きつけ皆が集まって来たところに、ゼフェルが血を拭っているのを見つけたアンジェリークは、あわててハンカチを差し出し傷口を押さえる。

「ゼフェル!マルセルに何をしたんだっ!？」

ゼフェルが何かをしたと思い込んでいるランディが、怒りに燃える瞳をゼフェルに向け、胸ぐらをつかみあげる。

「……別に、何にもしてねーよ」

忌々しそうにランディの手とアンジェリークの手を振り払うと、ゼフェルは顔をそらした。

「何もしていない訳、ないだろう!？」

さらに詰め寄ろうとするランディをアンジェリークが制止する。

「ああ、もうやめてください! 私、マルセル様を追いかけます。

ロザリア、後のことは頼んだわ、よろしくね。それからジュリアス様、マルセル様とゼフェル様を宴を台無しにしたって怒らないでくださいね」

にっこりと誰にも有無を言わせぬ天使の微笑みを浮かべ、やんわりとジュリアスに釘をさすと、アンジェリークはドレスをひるがえしてマルセルが走り去った方に駆け出した。

怒鳴ろうとしていたジュリアスはぐつと言葉に詰まり、ゼフェルにお仕置きをしようとしていたオスカーはあわててその手を離れた。「あらあら、皆様の操縦方法を良くわかってるんだから」

見習わなくっちゃ。とロザリアはつぶやきながら、嫌がるゼフェルを引きずって傷の手当てをし、てきぱきと指示を与え、何事もなかったように宴を続けたのであった。

緑豊かな森の中を、彼女のイメージそのままの、純白と淡いピンクで美しく彩られたドレスを身にまとい、緩やかなカーブを描く金色の髪を弾ませたアンジェリークがマルセルを追いかけてすぐに走っていく。

マルセル様……どうなさったの？

貴方が望むから、私は女王になったのに。

貴方が、私を女王に導いたのに……お祝いしては、くだらないのですか？

アンジェリクはよく二人で一緒に過ごした森の奥にある——守護聖しか立ち入れないという——高原へと急いだ。

きつと、あそこ。

『僕ね、悲しい事とかあるとここに来てお花に埋もれるの。そして、皆が元気をたくさんわけてくれるんだよ。アンジェも何かあったらここにおいでよね、絶対元気になるから』

と、穏やかに微笑むマルセル。

『ここにはいろんなお花がたくさんあるけど、僕はこの白い百合の花がいちばん大好きだよ。だってアンジェみたいにとっても優しくて、いい香りがして、綺麗なんだもん』

と、はにかむマルセル。

——このまま時が止まってしまえばいいのに——

そう思ってしまうほど、穏やかな時間が二人の間に流れていたあの場所に。

マルセル様はきつといらっしやるわ。

森の奥にある高原で、マルセルはうつぶせに倒れ込み、吹き抜ける風に身をゆだねながらさっきのことを思い出していた。
ゼフェルの言葉が頭の中にこだまする……。

『おめーの本当の望みはそんなこっちゃねーくせに！』

本当だよ、本当にアンジェに、ここにいて欲しかったただけなんだ。

『キレイ事言ってんじゃねーよっ！』

瞳をきつく閉じ、ギュッと草を握り締める。

キレイ事、なんか、じゃ、ない、よ……。

『おめーはアンジェリークがおめーだけの側にいて欲しいんだ。』

ちが……。

『おめーだけに微笑んで欲しいんだ。』

ちが……う……よ……。

『その頬に触れて、キスして、抱きしめて、全部お前だけのモノにしたいんだよっ！』

……………！！

ぼんやりと目を開け、涙が流れるままに焦点の合わないアメジストの瞳をさまよわせる。
ふと、その瞳は白い影を捕らえた。

白い……百合……？

マルセルの脳裏にアンジェリークと過ごした、甘い淡い時がよみがえる。

君が……………。

顔をかしげ、ふわふわの金色の髪を揺らし、大きな瞳を細めてやさしく、可憐に微笑むアンジェリーク。

いるだけで……………。

綺麗なエメラルドの瞳を輝かせて、一生懸命自分の話に耳を傾ける素直なアンジェリーク。

よかったんだよ……………。

アンジェリークと一緒にいられるのが嬉しくて、思わずアンジェリークの頬にキスをしてしまった時、真っ赤になりはにかみながら微笑んだ無垢なアンジェリーク。

アンジェリーク！！

——— 心の中で、何かかはじけた音が、聞こえたような気がした———

そう……………だよ。ゼフェルの、言う通りだよね。

僕は、僕は、アンジェが大好きだから、側にいて欲しかった。微笑んでいて欲しかった。

…………… 僕だけのアンジェでいて欲しかったんだっ！！

涙にぬれたアメジストの瞳をさまよわせ、無意識に白い百合に手を伸ばし、まぶたをふせ頬を寄せてつぶやいた。

「僕に勇気を与えてくれるかい？ それとも、もう、勇気を出しても、ムダ……………なのかな？ 教えてよ。アンジェ……………」

「何をお教えしたらいいんですか？ マルセル様」

愛しい人の声が間近で聞こえてきたのに驚いて、マルセルは飛び起きた。

「ア、アンジェリーク……」

「はい」

にこにこと、周りの者の心をほぐす力を持った、柔らかな微笑みを浮べたアンジェリークがそこに立っていた。

走って来たのだろう。アンジェリークのやわらかい金色の髪は少し乱れ、ドレスには草花とすれ違った時についたであろうしみがたくさんあった。

息を切らしつつも微笑みを絶やさず、まっすぐと自分を見つめるアンジェリークが、とても、とても眩しく見えた。

マルセルは予想外の出来事に驚いたが、女王になっても変わらない彼女の行動に、呆然としつつも、うれしさがこみ上げてきた。さつきまで悲鳴をあげていた胸の奥には、じんわりと暖かいものが湧きあがり、その傷口をみるみる癒していった。

大きなアメジストの瞳を、驚きでいっぱいにながら座り込んでいるマルセルの目線に合わせるように、アンジェリークはその場へたと座った。

衣擦れの音と一緒にふんわりと漂ってきた百合の香り——それはアンジェリークのものなのか、側に咲いている百合のものなのか——それがマルセルの胸の動悸を高くする。

乱れた金の髪を白く細い指で耳にかけ、少し困ったように微笑んでアンジェリークは口を開いた。

「もう、びっくりしちゃいました」

ふいっとそっぽを向き、少しすねたように口を尖らせ話を続ける。
「マルセル様ったら、ちつとも側に来てくだらないし、私、気になつてマルセル様の事をちらちら見ていたんです。そしたら、ゼフェル様と何か険悪な雰囲気になつて……マルセル様がいきなりゼフェル様を叩いちゃうから、本当にびっくりしたんですよ」

「見て、たの？」

マルセルに顔を向け、うなずいて肯定するアンジェリーク。

アンジェリークが、自分が側に来ないことを気にして、自分を見ていたということに驚き、そして、少し甘い希望を抱いて……マルセルは思い切つて問いかけた。

「ア、アンジェ。その……僕が、君の側に……行かなかったの……つて、どう、思ったの？」

どういつ反応が返ってくるのか、恐くて思わずぎゅっと目をつぶる。

ふう。

小さな、小さな溜息が聞こえた。

アンジェが困つてる……！

身体をこわばらせ、——逃げてしまおう——そう思った時、信じ

られない言葉が聞こえてきた。

「とても、とても淋しかったです……」

寂しそうにうつむき、アンジェリークは続けた。

「女王になったら、真っ先にお祝いしてくださると思っていたんですもの……。だって、マルセル様が望むから、私は女王になったんです。マルセル様が導いてくださったから、私は女王の道を選んだんです」

ドレスの裾をもてあそんでいた手はいつの間にかきつく握りしめられ、その手にいくつもの真珠のような涙が零れ落ちてきた。

驚いてマルセルがアンジェリークの顔を見ると、遠くを見つめているエメラルドの瞳から涙がとめどなくあふれていた。

「……アンジェ……」

「私、マルセル様の側にいられるなら、女王でも、補佐官でも……どんな立場でもよかったです。こんな事、ジュリアス様に知られたらものすごく怒られちゃいますけど……。でも、マルセル様が私を女王に。そう望まれるのなら、それに応えたくて頑張ったんです」

マルセルは信じられないと首をふった……。

「僕……そんな……」

君に女王になって欲しいなんて……。

『アンジェが女王になってくれたら、ずっと一緒にいられるのになあ』

！！

『アンジェならきつと立派な女王になれるよ！ 僕、一生懸命応援するから頑張つてね』

ああ……僕が……泣かせてしまったんだね……。

女王試験が始まったばかりの頃、まだ、アンジェへの気持ちがつきりしない——ただ『好き』だという事しかわからなくて、正直に思った事を口にした——その言葉をずっと覚えていて、君は女王になったの？

『女王になんてならないで、ずっと、ずっと僕と一緒にいて欲しい』

その言葉が……勇気が出なくて言えなかった……。

そして、僕が勇気を出せなかったせいで、君を泣かせてしまったんだね。

僕が……君を女王の位に押し上げてしまったのに……！！

アンジェリークの視界が不意にさえぎられると、あたたかい、陽

だまりの香りに抱きしめられた。

「ごめんね、アンジエ。僕に勇気が足りなかったから、君を泣かせてしまったんだね」

マルセルは、初めて愛しい存在を抱きしめて、そのぬくもりに、目眩がしそうなほど嬉しいと感じる自分を知った。

マルセルに抱き締められ、両腕の行き場に困っていたアンジェリークは、戸惑いながらもマルセルの背に腕を伸ばし、しっかりと抱きしめた。

「……もう、遅いかもしれないけど、これだけは聞いてね」

アンジェリークの香りに包まれながら、マルセルはずっと気付かない振りをしていた自分の気持ちを伝えた。

「僕はね、アンジェリーク、君が大好きだよ。こんな事、何度も言ってるから信じてもらえないかもしれないけど、いちばん大切な人なんだよ？　僕はね、本当はね、女王様なんかじゃなくて、僕だけの側にいて欲しかったんだ。でも、僕は君に嫌われるのが恐くて、今の関係を壊すのが恐くて、言えなかった。そして、君がいなくなるくらいならいっそ、僕のものにならなくても、女王にさえ、なってくれたら……ずっと一緒にいられる……そう……思ってしまったんだ。だから、君が女王になれるように育成のお手伝いをたくさんしちゃったんだ」

身体を少し離し、アンジェリークを見つめて優しく微笑むと、瞳を閉じておでこ同士をそつとあわせる。

「ごめんね、僕が君を女王にと望んだのに、君はそれに応えてくれたのに。いざ君が女王になってしまつと僕はとても悲しかったんだ。

だから、素直にお祝いを言っておあげる事が出来なかったんだ」

マルセルは、顔をあげて恥ずかしそうに瞳をそらした。

「……それをゼフェルにずばり言い当てられちゃって……思わず、叩いちゃったんだ」

真っ赤になったマルセルを見て、アンジェリークは思わず笑ってしまう。

「やだ、マルセル様ったら。まあ、ゼフェル様もすごい言い方をされたと思いますが、叩いちゃった事、ちゃんと謝りましょうね」

今度はマルセルがアンジェリークに抱きしめられた。

甘い香りとやわらかなぬくもりに包まれて、マルセルはこのぬくもりを離したくはないと、心からそう思った。

「私、一生懸命女王として頑張りますから、マルセル様の側にいてもいいですか？ 執務がお休みの日には以前みたいに二人でここに来たり、一緒にお花を植えたりして過ごしてもいいですか？ お休みの日はマルセル様だけのアンジェリークでいたいんです」

マルセルの反応が恐かったのか、抱きしめていた腕をゆるめて、アンジェリークは不安でいっぱいのエメラルドの瞳で、驚きで見開かれたアメジストの瞳をまっすぐと捕らえる。

「女王になった私では……いや……ですか？」

ああ、そうだよ、君は女王になったからって何も変わらないんだよ。

きっと今までの常識を打ち破ってでも、ずっと僕の側にいてくれるんだよ。

「いや……な訳、ないよ。『立場』なんてものを気にして拗ねてい

たのは僕。勇気が出せなくて君を悲しませたのも僕。それなのに君は僕の側にいてくれるって言うてくれるんだね。ごめんね、そしてありがとう。大好きだよ、アンジェリーク。ずっと僕の側にいてね。僕だけに本当の君を見せてね」

止まっていた涙をまたあふれさせて、泣き笑いになっているアンジェリークがたまらなく愛しく、この気持ちをどう表現していいのかわからないマルセルは、無意識に彼女を抱き寄せて、涙が伝う頬にふれ、唇で涙を拭った。

いくつものキスを頬に、まぶたに、額におとし、どちらからともなく唇を寄せ合った。

大好きだよ、アンジェリーク。

君がいるだけで僕は幸せになれるんだ。

仲良く寄り添う二人の側で、白い百合は嬉しそうにうなずいていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9595i/>

アンジェリーク | Marcel | 君がいるだけで.....

2010年10月14日15時31分発行